

逆風下こそイノベーションの創出を

執行役専務

東 実



昨年後半からのグローバルな経済指標の変動や原油価格の高騰など、一寸先が見えないほど経済は変化しています。このような激変現象は、世界中が急速にネットワーク化し、ビッグマネーが雷雲のように動き回ることに起因していると思われます。どの国も経済的安定を維持することは難しく、きのうの順風がきょうの逆風になっても驚かない時代の到来です。

また、エレクトロニクス産業界で起きている現象では、プレーヤー過多による供給過剰と、技術のモジュール化による異業種参入のため、売価ダウンが常態化しています。現状と同様な商品やサービスで事業を続けるかぎり、わずかな差異化技術では国際競争で勝ち続けることはできず、次々と現れる新たな競争相手にいずれは負けてしまうでしょう。

東芝は、“利益ある持続的成長”を経営方針のトップに掲げています。逆風の経営環境のなかでこの方針を実行し、現実のものとするには、次々とイノベーションを創出することしか解はありません。一方で、これがいかに難しいことであるかは過去が物語っています。しかし、イノベーションが人間の創意工夫で生まれるものと考えれば、その時代背景に強く依存していることに気づきます。14世紀にイタリアで興ったルネッサンス、19世紀後半のフランスの印象派絵画とドイツのロマン派音楽、20世紀初頭の欧州の量子物理学など、ある時期、ある場所で天才たちが塊のようにその才を発揮しました。共通しているのは、“従来の風土や様式からの脱皮”です。彼らを覆っていた閉塞(へいそく)感、常識、形式主義を打ち砕き、新しいものを創(つく)り出そうとする意識と意欲、そして果敢に取り組む勇気とエネルギーだったと思われます。

われわれが立っている現在の状況は、前述の時代背景に類似していると思われます。多彩かつ多様なアプローチで立ち足かかる壁に穴を開け、新たな価値を創り出すチャンスだと思います。当社には多くの才能が存在しています。個人個人が自己をしっかり認識・評価して、自分の長所を磨き上げ、全力を挙げて課題に取り組み、解決の糸口をつかんでいきます。その小さな成果が基になって大きな事業に育ったとき、イノベーションは現実のものとなるのです。一つのイノベーションが周りを刺激し、次々と創出されることを願っています。

2007年は、事業を強化している半導体と原子力をはじめ、先端的なシステムLSIを組み込んだデジタルプロダクツに加えて、新たなパラダイムである“エコ&エナジー”に焦点を当てました。代表的な技術成果として、半導体では大容量画像・映像などのコンテンツを低消費電力で高速に処理する高性能新型プロセッサ“SpursEngine_{TM}”，原子力では安全性と経済性を極限まで高めた最新鋭原子炉AP1000向けタービン、デジタルプロダクツではAV機器間の連携を可能にした“レグザリンク_{TM}”対応デジタルハイビジョン液晶テレビ、エコ&エナジーでは省エネ大賞を受賞した家庭用ルームエアコン“大清快_{TM} BDRシリーズ”などが挙げられます。

以上、東芝グループの技術開発の成果の一端を紹介いたしました。ぜひ本文をご一読いただき、皆さまのご助言、ご指導をいただければ幸いです。